

maintenant をめぐって ーフィクションのテキストにおける非直示的用法を中心にー

田原いずみ
(明治学院大学)

本発表では、フランス語の副詞 *maintenant* の非直示的用法、つまり発話時点を指示しない場合を主な考察対象とし、それを中心に受け手がどのような解釈のプロセスを経て *maintenant* の適切な解釈に至るのかということについて論じてゆく。

maintenant が過去時制と共起し非直示的に用いられる場合の分析をするにあたって、特に受け手による複雑な認知的処理を要すると思われるフィクションのテキスト（主に小説）における発話解釈に注目し、発話が発話者以外の意識主体の視点を通して解釈される際に産出される“主観化のコンテキスト効果”の概念を導入する。次の①、②は自由間接話法の発話（①）、そして語りの文（②）における *maintenant* と半過去の共起の例である。

① Il se demanda, sérieusement, s’il serait un grand peintre ou un grand poète; et il se décida pour la peinture, car les exigences de ce métier le rapprocheraient de Mme Arnoux. Il avait donc trouvé sa vocation ! Le but de son existence était clair *maintenant*, et l’avenir infaillible. (Flaubert, *L’Education sentimentale*)

② La neige tombait *maintenant* jour et nuit, ensevelissant la plaine et les bois sous un linceul de mousse glacée. Les loups venaient hurler jusqu’à nos portes. (Maupassant, “La folle”, *Contes de la bécasse*)

発表の後半では、*maintenant* に関する考察の発展として、フィクションのテキストにおける *maintenant* と日本語の“今”の非直示的用法を比較し、両者の間の類似点と相違点を明らかにしてゆく。またそれを通して主観性の表現に関するフランス語と日本語の特性に関する考察を加える。